

研究活動報告

第75回数理社会学会大会

第75回数理社会学会大会 (JAMS75) は、2023年8月25日 (金)・26日 (土) の2日間、愛知大学名古屋キャンパスを会場として開催された。会員80名 (うち学生14名)、非会員33名 (うち学生18名) の参加申し込みがあり、活発な議論がセッション後も各所で展開されていたのが印象的であった。自由報告 (口頭発表) は3部会11件で、とくに第1部会「ジェンダーと家族」では、日本の結婚市場におけるミスマッチのメカニズムを探るサーベイ実験 (打越文弥会員) や、性交渉の頻度と家事分担が幸福度に及ぼす影響についての計量分析 (石橋拳会員) など、研究所で行われる調査研究とも深く関わる内容の報告が複数なされていた。

国立社会保障・人口問題研究所からは、毛塚和宏会員が以下の報告を行った。

毛塚和宏・鈴木遼「大学進学選択と経済的資産の関連：損失回避傾向の異質性に注目して」

萌芽セッション (ポスター報告) は45件を数え、これまでの大会と同様に、幅広い研究対象やトピック、手法が扱われていた。著者個人としては、サーベイ実験やオンライン調査、係留ヴィネット法や欠測・測定誤差に基づくバイアスなど、比較的新しい手法や問題系に関する方法論について新たな知見を得ることができ、非常に勉強になった。

今回の JAMS76 は、2024年3月に大阪大学で開催予定である。

(吉田 航 記)

数学を用いる生物学

統計数理研究所にてワークショップ「数学を用いる生物学」は、2023年8月28日から29日までで開催された。数理モデル研究者と統計を主に用いる実証研究者との交流会である。数理モデルの研究という演繹的な方法を用いた、生態学、進化、個体群動態および人文科学の研究と統計学とう帰納的手法によるこれらの研究テーマのそれぞれ研究者達が自身のテーマに沿って講演を行った。筆者は「多地域レスリー行列の理論と応用～日本の人口減少社会における国内・国際移動の影響～」というタイトルで招待講演を行った。数理モデルの研究者は数学の解析の主張する事が多々あり、実際のデータを知る機会として有意義なものである。一方、統計を用いる実証研究者にとってその背後にある数理モデルの実態や仮定を知る機会となったはずである。こうした交流の場が定期的に設けられる事はより洗練された研究を考える上で必要であると感じた。

(大泉 嶺 記)

第33回日本家族社会学会大会

家族に関する社会学的理論や法制度、質的調査、量的調査などに関心のある研究者が集う第33回日本家族社会学会大会が、2023年9月2日 (土)、9月3日 (日) に神戸大学 (神戸市) を開催校として完全対面の形で開催された。

初日には、ラウンドテーブル「学会事業としての NFRJ にいま何が求められるのか？」が開催され、オーガナイザーや中堅・若手会員を中心に、学術的公共財としての NFRJ (全国家族調査) の

意義やプロジェクト体制の充実化（ワークショップの定期開催、公的統計の利活用）などについて提案・議論がなされた。その他①就業と家族、②若者、③教育・階層、④ケア・家事、⑤女性と役割、⑥子ども、⑦国際比較の自由報告セッションが開催された。

二日目は、⑧男性と家族、⑨結婚・夫婦、⑩制度・政策についての自由報告セッションが開催された。その他、開催校企画テーマセッションとして「地方社会で生きる外国人住民の暮らし・仕事・学校—地域研究から迫る兵庫県豊岡市の事例—」が企画され、シンポジウムでは「若者の地方暮らしから考える新時代の家族」について議論がなされた。

自由報告では2、30分の全体討論の時間が設けられたものが多く、報告内容の理解を深めたり、発展可能性が論じられるなど有意義であった。また社人研からはオーガナイザーや司会での参加者が多く、進行や活発な議論の取りまとめに貢献していた。（岩澤美帆 記）

2023年日本数理生物学会年会

2023年9月4日～同年9月6日に奈良女子大学で開催された「2023年度日本数理生物学会年会」に参加した。この会は筆者が所属する日本数理生物学会の年会である。コロナ禍後、初の対面による大会である。久しぶりの対面大会となって参加者も例年より多く盛況であった。筆者は、「多状態年齢構造化人口モデルに現れる Fredholm 方程式」というタイトルで講演を行った。内容は筆者らが考案した状態遷移の経路の和として人口動態のモデルの固有システムを再解釈する方法についてである。数理生物学会において若手会員もまだまだ増えていることから、しばらくはこの分野は安泰と感じている。しかし、研究内容が実験とのコラボが増えたため、特定の現象に関するケーススタディが散見され、進化や個体群動態の本質に関わるようなダイナミックな研究が減ってきていることが危惧される。こうしたケーススタディの増加は検証可能なモデルを生み出す一方、数学的な奥深さを伴わない事が多いからだ。とはいえ、対面形式の学会が復活したことは今後の研究活動を活性化させるに喜ばしいことである。（大泉 嶺 記）

オックスフォード滞在と英国人口学会への参加

2023年9月7日から11日まで、オックスフォード大学ワダム校（Wadham college）に滞在し、同大学インターネット研究所（Oxford Internet Institute）のエカテリーナ・ヘルトグ（Ekaterina Hertog）准教授との共同研究を行った。同准教授とは、科学技術振興機構（JST）社会技術研究開発センター（RISTEX）の研究開発事業「AI等テクノロジーと世帯における無償労働の未来：日英比較から（令和2年1月～令和5年12月）」（代表：お茶の水女子大学大学院・永瀬伸子教授）にて共同研究を行っており、共同論文の執筆にかかる作業を行った。オックスフォードへの滞在は、2020年1月以来、約4年ぶりであったが、街の様子は変わっておらず、ヘルトグ氏が手配してくれたワダム校のゲストハウスにて快適かつ生産的に過ごすことができた。

同11日より列車にてヘルトグ氏と共にキール（Keele）に移動し、同日午後よりキール大学（Keele University）にて開催された英国人口学会（British Society for Population Studies）の年次大会に参加した。同学会では、上記共同研究プロジェクトのこれまでの成果を報告するパネルセッション「Revolutionizing home life: Exploring the impacts, opportunities of domestic automation across cultures, generations」が企画されており、筆者は「Intergenerational Transfer of Care Work: